「親密性前線」シフト仮説

－ヒトゲノム時代における、ロボットペット・バイブレーター・ドラッグ・自傷・理解しがたい殺人などの近未来 / 「ココロとモノ」のダーウィニアン社会学・序説－

桜井芳生

【はじめに】

テクノロジーの進展と、ヒトの文化の変容とは、今後さらに関連していくだろう。本稿は、昨今進展の著しい、二つのテクノロジーが、ヒトの文化にどのような影響をあたえうるかについて試論的に探索する試みである。二つのテクノロジーとは、「ヒトゲノム」解析をはじめとする遺伝子工学であり、ロボットの発展普及である。われわれの視点を提示する前提として、心理学における「心の理論」アプローチを援用する。心の理論（のある論者たち）によると、われわれの脳は、環境を、いわば「物理的モノとして把握する」メカニスティック認識の機能と、いわば「こころある者として把握する」メンタリスティック認識の機能に、相対的に分化している。さらに私は、同一対象の「二重認識」の困難性をあらたに仮説する。

この仮説をふまえると、任意の認識時点において、世界は、「心ある者」と「心なき物」とからなっているようにみえるだろう。この「心ある者」と「心なき物」との境界線を、「親密性前線」と呼んでみよう。本稿の主要提議は、ヒト社会において、この親密性前線が、「いままで心ある者とみなされてきたものが心なき物へとみなされる」その一方で、「いままで心なき物とみなされてきたモノが、心ある者とみなされる」ように、「相補的にシフト」しつつある、というものである（親密性前線シフト仮説）。

端的にいって、遺伝子科学の発展と、軌をいつにして、（いままで心ある者とみなされてきた）ヒト（の一部）が、心なき物としてみなされる傾向があり、他方で、いままで心なき物としてみなされてきた機械の一部（ロボットなど）が、心ある者としてみなされる傾向がしょうじている、と考える。

【「ココロとモノ」のダーウィニアン社会学】

筆者は、現代ダーウィニズム生物進化論の成果をふまえた社会学を構想している。このアプローチを暫定的に「ダーウィニアン社会学」と呼んでいる。現代ダーウィニズム進化論の勉強をしていると、いやでも目に入ってくるのが、いわゆる「ヒトゲノム計画」に代表される人間の遺伝子的解明の運動である。他方、社会学という「文系」学問のなかで、あるいは、文系大学教育を行っているなかで、ダーウィン進化論とか、利己的遺伝子とか、「「私」はじつは、遺伝子の自己複製機械（利己的遺伝子の乗り物）」とかいった議論をすると、「たしかに、科学的には、「そう」かもしれないけれども、、、、。でも、やっぱり、、、、、」といったような、「感情的反感」をもたれる場合がおおい。ヒトゲノム計画を代表とするような、「遺伝子的解明」は今後も不可逆的に進行していくだろう。他方でまた、上記のような感情的反発もかなり必至であるように直感される。はたして、このような「遺伝子コンシャス社会」における社会意識は

どのように変容していくのであろうか。このような問題意識を思案しているうちに、まさに、現代ダーウィニズムの一理論である「心の理論」アプローチを援用することで、この問題にたいする、一つの見通し（仮説）を、提起できるのではないか、と考えるようになった。これは、ひとえにヒトゲノム計画にとどまらず、現代ヒト文化の変容に関して、かなり大きな射程をもつ（とおもう）一つの現象を仮説することである。それは、「親密性前線のシフト」とでも呼びうるトレンドである。この一つのトレンドが、さらにさまざまな領域での個別事象として現象しつつあるのではないか、と、仮説する。これは、ヒトの文化の諸領域にかなり不可逆的な変化をあたえると私は予感している。このトレンドが波及する領域は少なくない、と思われる。よって、それを追尾する研究プログラムも、長期・多方面に渡ると思われる。筆者としては、本稿の読者の方々の何人かが、この仮説・研究プログラムに合流していただければと、希望する。本稿では、この研究プログラムの嚆矢として、仮説発想の次第を、まず述べてみたい。そして、筆者が目星をつけているケーススタディ・実証のいくつかのターゲットについて、いまだ着手段階であるが、略述してみたい。

【心の理論】

いまうえで、ヒトゲノム計画に言及したが、本稿の発想自体、すでに述べたとおり、昨今進境がいちじるしい、進化論的人間理解に大きくよっている。とくに本稿において参考にしたいのは、進化心理学においておおきな支持をえつつある、いわゆる「心の理論」アプローチである。

「心の理論」と呼ばれるアプローチは、認知心理学あるいは進化心理学と呼ばれる分野において、近年急速に進展している基本仮説・分析枠組みである。「心の理論」アプローチの基本的問題意識は、ヒトはいかにして他者の心を把握しているか、というものである。これ自体は、ごく自然な問題設定であろう。そして、その問題にたいする、このアプローチの基本的回答は、「ヒトビトは、もともと、「心の理論」とでも呼ぶべき、認識枠組みをあらかじめ持っている。それを利用して他者の心を理解している」というものだ。この回答も一見すると、ごく自然にみえるかもしれない。

しかし、その含意のインパクトは、じつは小さくはない。説明してみよう。

まず、ことばについて注意すべきだろう。私自身導入のために、あまり精確でなく言ったが、じつは、「心の理論」とは、心理学者が持っている「理論」ではなくて、生きているわれわれヒトビトがすでにもっている他者の心を認識する上での枠組みのことである。したがって、じつは、「心の理論」的発想をする心理学は、「心の理論」の理論、と呼ぶべきなのである。

【メンタリズム】

つぎに、そのヒトビトがもっている「心の理論」の内実が問題になる。これについては、心理学者がさまざまな個別の仮説をたてて、実証研究をしている。ここでの文脈にひきつけると、重要なのは、以下のポイントである。

すなわち、ヒトビトは他者の心を把握するさいに、その他者の「意図」（「つもり」「目的」）を読み込んでいることが多い、ということである。

ある個体が、別の物体にたいして、予測する際には、おもに二通りの仕方があるだろう。

第一は、いわば物理法則にしたがっての予想である。あるものがある程度の高さから放たれたら、たとえ重力の法則を正確には知らなくても、「落ちるだろう」と予測できるだろう。

それにたいして、ある個体が、おもに生物の振る舞いを予想する際には、第二の予測の方法があり得る。それは、対象の「意図（つもり・目的）」を把握する、という方法だ。私にたいして、熊とかライオンがじっとみつめてにじり寄ってきたら、「あいつは、オレを、おそって食べようとしている」（おそって・食べる、という意図（目的）をもっている）と、予想することができるだろう。その結果、近い未来においてその熊なりライオンなりが、私にとびかかってくることが予想できるだろう。そのため、あらかじめ私は逃げるということもできるだろう。このように、相手の「意図」を把握し、それによって相手の振るまいを予測し、あらかじめの対処としての行動をとることが可能になるだろう。

「心の理論」と称される一連のアプローチを採用する心理学者たちは、このようにわれわれヒトには、自分ならびに他者の心的状態を理解するような能力が進化的に獲得されてきた、と考える。この自他の心的状態を理解するような進化的に獲得された能力のことを、「心の理論」と呼んだり「メンタリズム」と呼んだり「フォークサイコロジー」（民間・心理学）と呼んだりする（ Baron-Cohen[1999] 等）。

【サリー・アン・テスト】

このような「他者の心を読むモジュール」がヒトをはじめする動物の一部に生得に備わっていると考えるのが、「心の理論」アプローチの共通の基本仮説といえるだろう。代表的論者バロン＝コーエンは、この心の読むモジュールをさらにいくつかの要素に分解する。多くの実験結果が、そのおのおのが実在する証拠といえると主張する。そして、この心を読むモジュールの一部の機能が十分働かないのが自閉症である、という。ここでは、有名な「サリー・アン・テスト」といわれる実験を紹介しよう。心理学者は、被験者の子供にサリーとアンという名の二つの人形をしめす。サリーがおはじきをある場所（バスケットの中）に置き、サリーが退出したあとで、アンがそれを別の場所（箱の中）に置くのを、子供にみせるのである。被験者の子供は、おはじきが元の場所から動かされたときにサリーはすでに退出していて、おはじきが動かされたことを知らないので、サリーはまだそれが元の場所（バスケットの中）にあると信じていると認めなければならない。「サリーは、どこにおはじきを探すでしょうか？」という質問に対して、ほとんどの正常児とダウン症児（対照群）が正答した。つまり、元の場所（バスケット）を指した。しかし、自閉症児の場合は、少数の者しか正答しなかった、という。この実験は、自閉症児は信念に関する心の状態の理解が乏しいことを支持しているという（ Baron-Cohen[1995] 等 ）。

【メカニスティック・コグニション】

これに対して、上で言った第一の認識方法は、対比的に、メカニスティック・コグニ

ション（機械論的認識？）と呼ばれる。すなわち、物理的操作のために適応してきた認知能力であり、ものごとを、数学的、客観的、普遍的、因果決定的に、認識する能力である。これは、狩猟における投擲や道具作成にとって、役に立つ能力であったとかんがえれている。こうかんがえると、なぜこの能力が相対的に男性に優位であるか、が説明しやすい。上と対比的に、「フォーク・フィジックス（民間・物理学）」とも呼ばれる。

【社会科学における認識論的対立？】

すでにバドコックが指摘していることであるが、これは、過去一世紀強の社会（科）学における、二つの認識戦略の対立を想起すると、理解しやすい（ Badcock[2001] ）。機械論的・行動主義的認識、と、理解社会学的・現象学的認識、との、対立である。

すなわち、一方においては、ヒトならびにヒトビトの社会を、「物のように」「心なきもの」のようにあつかうアプローチが存在した、だろう。他方で、ヒトならびにヒトビトの社会を、「心ある者」として「理解」しようとするアプローチがあっただろう。

バドコックは、社会科学におけるこのような二大認知戦略の対立を、われわれの脳における上記の二つの認知能力の違いに対応させて理解することをすすめている（筆者も同意する）。

【同時同一対象二種認知の困難性：仮説】

さらにこの論脈に関連させてあまり自覚されていないようにみえる一つの仮説を，提起してみたい。

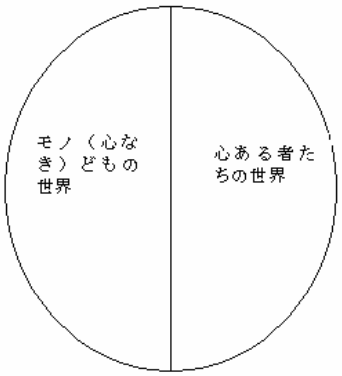
それは、「同時同一対象二種認知の困難性」の仮説である。すなわち、われわれヒトは、同一の対象にたいして、同時に、以上の二種類の認知法を、働かせることがむずかしい、という仮説である。

たとえば、ヒトに対する開腹外科手術とか、犬でもカエルでも（あるいはヒトでも）解剖する場面を仮想してみてほしい。

メスをいれて、開腹して、腔内の臓物がみえてくると、それまで「こころある」他者としてあった彼（女）が、一瞬「こころないモノ」のように見えてくるのではないだろうか。

ひとたび、バドコックによって、われわれの脳には二つの認知能力があり、その両者をつかって、ヒトの社会を認識すべきだ、といわれれば、それは至極当然のようにきこえてしまう。しかし、こんな当然のことに気がつかずに（気がついても？）一世紀にもわたって、社会科学において、上記のような認知アプローチをめぐって「対立」が鎮静しなかったこと自体、この「同時同一対象二種認知の困難性」に由来しているのではないだろうか。すなわち、「同じ一つの社会という対象」を認識する以上は、「メカニスティック認識」でいくのか「メンタリスティック認識」でいくのか「選択」しなければならないかのような（それ自体根拠のない）「暗黙の要請」（同時同一対象二種認知の困難性）が効いていたのではないだろうか。

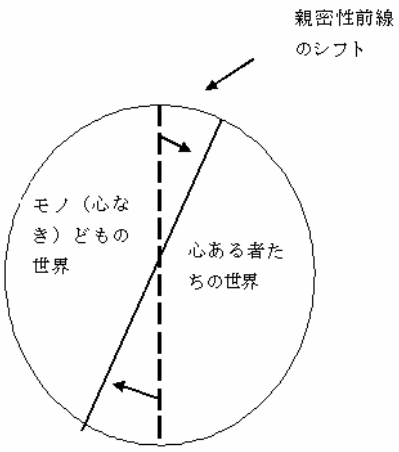
【世界の二分と、前線のシフト】



以上の「同時同一対象二種認知困難」の仮説をみとめたとすると、任意のヒトにとって、世界は、「心ある者」と「心なきモノ」との集合として認識されることになるだろう。

この、各人にとっての、「心ある者」の集合と、「心なきモノ」の集合との境界線を、あくまで暫定的に「親密性前線」と呼んでみたい（もっといい命名があったらぜひご教示いただきたい）。

まずのべたいのは、遺伝子科学の発展や、ヒトゲノム計画の進展と、軌をいつにして、いままで「心ある者」とされたものにたいして「心なきモノ」として認識するような「変化」がしょうじつつあるのではないか、ということである。その一方で、いわば上にたいして相補的に、いままで「心なき物」とされたものにたいして「心ある者」として認識するという変化も生じていると私は考えている。この両者のトレンドをあわせて、「親密性前線のシフト」、の仮説と呼んでみたい。



この「仮説」については、すぐ後で述べるような、理論上・実証上の難点がのこっているので、本稿の段階では、未だとても確証された理説とはいえない（本稿で「仮説」と呼ぶ理由でもある）。にも関わらず、拙速にもここで発表したいのには理由がある。第一は、ぜひ本誌の読者（研究者）に、この仮説による研究を呼びかけたいからだ。これはなにも筆者の意見・本仮説に賛同してほしいということにはかぎらない。この仮説の「否定」をめざす研究でも大いにけっこうである。筆者はこのトレンドはさまざまな社会・文化領域で現象すると予想する。しかし、ありうべきすべての領域での実証研究は一人の研究者の手にはあまる。第二は、「仮説として定式化して、はじめて、現象が見える」ということがあるからだ。よくいわれるようにほとんどの観察は、理論に依存する。とくに本仮説のように、一見すると関係のないように見える諸領域に通底的な同時代現象があらわれるだろうとする場合、いわば「そうかもしれない。なにかおもいあたることがないだろうか」と「かかって」見ないと、なかなか現象が見えてこないだろう。もちろん、だからといって（だからこそ）、そのような先入見によって、実証作業がおろそかになってはいけない。実証については以下に述べるように、それはそれとして厳密に行うべきである。が、まずは実証にかける「前提」として、現象が見えてこないとしようがない。そのためには、さきばしってでも仮説を定式化せざるを得まい。

次に、この仮説ならびにそれにつくアプローチの問題点をいくつか述べてみたい。第一は、理論的に大きく見える問題である。すなわち、この仮説の「原因」が確定して

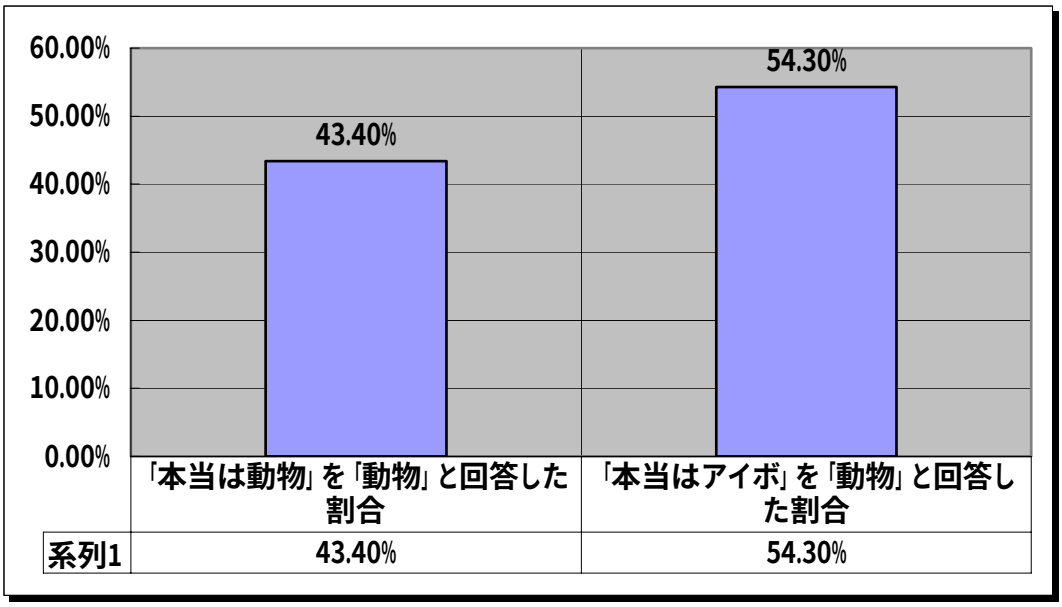
いない、という問題である。上記のようなトレンドを仮説すると言ったが、このトレンドの原因についてはぼかしてある。ヒトゲノム解明と「軌をいつにして」と言ったが、ヒトゲノムの解明が、（唯一の、必要な、十分な、最大の、いくつかあるうちの一つの,,,,？）原因であると言い切ったわけではない。それでは、科学的仮説としては身分に欠けると考える向きもあるかもしれない。しかし、筆者としては、この「原因」については当面オープンにしておきたい。その方が、さまざまな発見の可能性を残すことになる、思考実験や実証においていろいろな条件（パラメータ）を動かしてみるよすがとなる、と思うからだ。第二は、実証場面での問題である。以下の部分でも、筆者がもくろむいくつかの実証局面を略述する。が、読者の中には、たしかにこのようなデータをこの仮説によって解釈するのはおもしろい。しかし、それはあくまで一つの解釈であって、他の仮説によっても、解釈できるのではないか、と感じる向きもいるかとおもう。これは、社会学的実証にはほとんど付き物の難点であって、払拭するのはむずかしいとおもう。筆者としては、おもに二つの仕方でもって、対処したい。第一の対処は、個別の実証するさいには、本仮説とそれに対抗するような仮説の競合状態を設定し、それぞれの仮説によって実証可能な「異なる」予測が生じるようにする、そして、実証を実行してどちらの仮説がよりたしからしいか、と示す方途である（本稿の段階ではできていない。今後、目指したい）。第二の対処は、個々の実証局面のみならず常識では関連ないと思われるような諸局面においても、同一の仮説が反証されないことをしめす、そうすることによって、一つの局面にのみ成り立つような仮説より、ヨリ大きな説明力と確からしさを示す（本稿ならびに、本研究アプローチ「全体で」、目指していることである）。実証についてはもう一つ難点がある。それは、ケーススタディをしたとして、論じたケースがどれほどの代表性・典型性をもっているかという懸念がしょうじてしまうということである（たとえば、後述のバイブレーターの事例）。とくに本仮説のような場合は、社会の個々の局面における先行的萌芽といえるようなケースをさがしだして論じることになるので、この懸念は生じがちである。論ずるケースが典型的・代表的であることが明らかになった時点では、すでに仮説自体が社会当事者にとってあたりまえになってしまい、仮説の認識利得がなくなってしまう。基本的には、その事例が代表的であることをしめすよりは、「より以前においては存在しなかった」ような事例が「すくなくとも一つは生起した」こと、をしめすことで論証としたい（が、これもまた「より以前においては存在しなかった」ことの論証は究極的には困難である）。最終的には、上記の「第二の対処」法に訴えざるを得まい。この点は読者の寛容を乞いたい。

【ロボットペット】

　このような親密性前線のシフトというトレンドが、社会のいろいろな局面で、現象するだろうと予想するわけである。これは「いままで心ある者と感じられなかった対象が、心ある者とした感じられるようになる」側面と、その「対偶」局面とに大別できる。前者の事例としては、ロボット、とくにロボットペット、後者の局面の事例としては、バイブレーターの使用、ドラッグの使用、人と物とが区別できない殺人,,,,などがそれにあたるのではないかと予想している。個々のトピックについては、比較的研究が進んでいるもの遅れているものがあるし、また、ひとつひとつについてモノグラフとし

て論じないと舌足らずになってしまう。が、研究プログラムの開始宣言としての本稿の主旨にかんがみて、あくまで現在研究できている範囲内であるが、いくつかのトピックにいて、以下略述してみたい。

まずは、「いままで心ある者と感じられなかった対象が、心ある者とした感じられるようになる」側面の典型として、ロボット、とくにロボットペットがあげられるだろう。ソニーが開発したロボット・犬（？）、アイボにかんして、インターネットで検索すると、多くのオーナーの「愛犬（？）記」を読むことができる。魂なき存在である機械に対して多くのオーナーが、魂のようなものを感じ始めているようである。と、筆者の観測＝直観をここでのべただけでは説得力に欠けるだろう。そう考えて、すでに別に発表した論文においてであるが、私は、ロボットペットについて、有名な「チューリング・テスト」ににた調査をやってみた（桜井芳生[2001]）。インターネット上から、「生身の動物ペットと人とのやりとり」の愛犬記（犬に限らないが）と、「アイボと人とのやりとり」を記述した愛「アイボ」記とを、採集してきて、アンケートをつくり、アンケート対象者に、その記述が「動物・対・人」なのか「アイボ・対・人」なのかを回答者にあてていただいたのである。この記述の採集自体無作為ではないので、このアンケートはあくまで一つの目安にしかならないだろう。しかし、「わからない」の回答肢も用意されていたので、回答者は不明と感じる場合には正否の解答を回避することができた。結果は予想以上に興味深いものだった。「本当は動物」について 7 問、「本当はアイボ」についても 7 問、を55人に方に回答いただいた。双方、のべ 385 問に対して、「本当は動物」を（正しく）「動物」と回答いただいたのが、 43.4% にとどまったのたいして、「本当はアイボ」であった「愛玩記」を「動物だ」とおもうと回答いただいたのが、 54.3% にものぼったのである。回答者たちについても、ボランティアの人たち、すなわち無作為抽出でない（ゆえに、検定はかけていない）ので、代表性はまったく保証されない。しかし、少なくとも、ロボットペットにたいして、はたから見て動物のペットと区別できないほど、親密的に相互行為している人たちが、存在し始めていることはかなりたしからしいだろう。



【親密性前線シフトの係争点としての、自己】
親密性前線のシフトの第二類型は、「いままで心ある者として対していた対象を、心なき物として対処するようになる」類型である。そのうちでもとくに興味深い地点のひとつは、「自己」である、と私は考える。端的にいって、自分にたいして、「心ある者」として対する構えから、「心なきモノ」として対する構えへと、（あくまで相対的に）変化するようなヒトが一定程度生じるのではないだろうか。すなわち、「自己にたいする、物（もの）的探求態度」である。自分をあたかも「物（もの）」であるかのように遇し、それにたいして、とくに快楽に関して、いわば、自然科学的？に探求していくベクトルが一定のちからをうるのではないだろうか。具体的には、それは、ドラッグの使用、と、機械を利用した性的快楽の追求などにあらわれるとおもう。
　注目されるのが、バイブレーター（いわゆる大人のおもちゃ）であろう。女性の性的快楽の喚起装置としてのバイブレーターの出現は意外に早く、約１世紀さかのぼることができる。これに関しては、Mainesの著書”Technology of Orgasm: "Hysteria," the Vibrator, and Women's Sexual Satisfaction”がくわしい(Maines[1998])。しかし、初期のそれは、ヒステリーにたいする「医療機械」として認知されてはじめて、流通しえたようである。端的に生理的反応としてのオーガズムをもたらしてくれる（しまう？）機械としてのバイブレーター、しかし、また、性的事象自体が、親密性と密接にかかわっている（固着してしまっている）がゆえに、旧来の「親密性前線」からの「反動形成」をうけやすい。このような事情を、女性のためのバイブレーター販売店のオーナーの女性のオンライン・エッセイにみてとることができる、とおもう。

【オンライン・エッセイ「バイブをつかおう」「ごめんねバイブ」より】
　彼女は、オンラインエッセイのなかで、以下のようにのべる。
「バイブは、エロティックファンタジーの具現化ではない。 / ただの、道具。マッサージャー。（略） / たかが、バイブ。 / それは、自分の身体を気持ちよくさせることができる、とっても大切な道具。 / 微妙なバイブレーション。 / 心地よいフォルム。/ 安心な素材。　身体にいいこと、心に気持ちいいこと、そのための大切なグッズ。（略） / 身体を知ること。 /　身体を喜ばすこと。/ 初心にもどって、さぁ、今日もバイブを使おう！」
「バイブなんてさ、好き・嫌い以前に、洗濯機とか炊飯器とか掃除機と同じレベルでの生活必需品だと思うんだけど、違うのぉ？　好き・嫌いでバイブを考えるって、それ自体意味がわからな～い、な私。バイブを嫌悪する人は、私にとっては洗濯板でしか洗濯しない、洗濯機は大嫌い、とか言う人と同じだもん。つまり過剰な懐古主義・マニュアル主義・ただの新しいもの嫌いとでもいうか・・・」
そんな彼女も、ヒトビトのバイブレーターに対する「反動」にであってしまう。
「「さきほどの電話は、そんなカタログ発送後の「送らないで」電話の１つである。
「オタクからなんかヘンなもの送ってきたんだけど、こういうカタログ、一切送らないで」。興奮した様子が受話器から伝わってくる40代～50代くらいの女性の声だった。
（略）。「どうして、送ってくるのよ！　うちの◯◯子は、こんなの使わないわよ！」

「は？」。ここで電話をかけてきた女性が、本人ではないことを知る。○○○○で買い物をしてくれた女性のお母さんだったのだ。「ええと、ご本人様ではないのでしょうか？」「そんなこと、関係ないわ。いったい、これは、何なの？　誰に文句言ったらいいの？」その方は大変な勢いで私にまくしたてる。娘さんの年齢は分からないけれど、何歳だってさぁ、カラダ気持よくさせるグッズに関心を持ったっていいんじゃない？買ったって、いいんじゃない？　妊娠リカちゃん買うよりはずっとずっと健全よ。というのは私の価値観だけれども、それにしても、興奮しすぎ。「こんなもの！」と何度も言われ、「こんなもの！」を売っている身としてはどうしたってイヤな気持になるもんである。「もう、送りませんので、ご安心ください」。私は力つきてそう言い、電話を切った。
こういう時、私はひどく脱力する。ショールームに入りバイブに囲まれながら「ごめんね、バイブ」と謝りたくもなる。」

以上のエッセイ（の前半）において、いわば即物的快楽享受機械としてのバイブレーターの発見、ならびにそれと平行した、即物的快楽感覚物体としての「自分の身体」の発見をよみだすことができる、とおもう。他方また、後半において、親密性前線シフト「以前」のヒトビトによる「反動形成」とそれによって攻撃された筆者もまた親密性前線シフト「以後」に「まだ完全にはふっきれていない」ことをよみだすこともできるだろう。

このように一つのエッセイを紹介するだけは、このトレンドの代表性・典型性は示せていない。トピックがトピックであるだけに、このように「当事者」がその現象の「意味」について比較的雄弁に語ってくれる事例は希有だろう。前述したように、社会変化の「萌芽」に特に注目する本アプローチとしては、ここでは、「以前においてはなかったような現象がここに少なくとも一つ存在している」ことを示すことで「はじめの一歩」としたい。このトレンドの代表性・典型性の論証は次の作業としたい。いわゆるレディスコミック雑誌の「巻末の広告」などでのバイブレーター広告の増大現象に着目することなどで、この作業を進展させることは可能であると考えている。

【人と物の区別がつかない少年たち】

「心ある（はずの）者を心なき物として把握する」という点がもっとも端的にあらわれているのが、「人と物との区別のつかない少年たち」の事例であろう。いわゆる「理解しがたい殺人」である。この点に関連して、宮台真司が非常に興味深い事実を紹介している。1997年にいわゆる「酒鬼薔薇事件」の際の「中学生の共感ファックスを何千枚も分析すると」（宮台，香山 [2001:12] ）、「一割は「人と物との区別がつかない」ことに共感していた」というのである。宮台の記述をもし信用するとすれば、これは本仮説にとって無視しがたい大きな状況証拠といえるだろう。さらに興味深いのは、同じ本の別の箇所における、対談者の香山リカの発言（以下）である。くりかえしになるが、「心あるもの（者）」と「心なきモノ（物）」とが出会う場として「自己」はもともと係争地点の一つになりやすいだろう。親密性前線がシフトすることで、「自己」の地点における「同時同一対象二種認知の困難性」が、露呈しやすくなる、ということがいえるのではないだろうか。このような視点で（も）、昨今の自己をめぐるいくつかの現象

を解釈することが可能になるかもしれない。以下のいわゆる「自傷」の事例は、「モノ」化した自己をふたたび「心」ある者へと取り戻そうとする行為としても解釈することが可能ではないだろうか。

「私は「私は私だ」という感覚が希薄で自分と物との区別がつかないケースも診てきました。 ……(中略 , 以下同様)…… 非分裂病のケースです。というか、病気なのかどうかもわからない。日常生活はある程度、普通にこなせるのに、…。…自分と物の区別がつかなくなっていくプロセスの中で、それを確認するために自分に傷をつける。その時の一瞬の痛み、流れる血でかろうじて「あ、これが私だ」という強烈な自己意識がもてると言います。過食をして、食べ物が喉を通過する感じ、胃がぱんぱんに膨らむ感じを確認している人も同じですね。そこで初めて「あ、私は物じゃない。自分なんだ」と実感が持てるんです。たくさんの男性と性的遍歴を重ねる人も同じ。」（宮台，香山 [2001:181-182]）

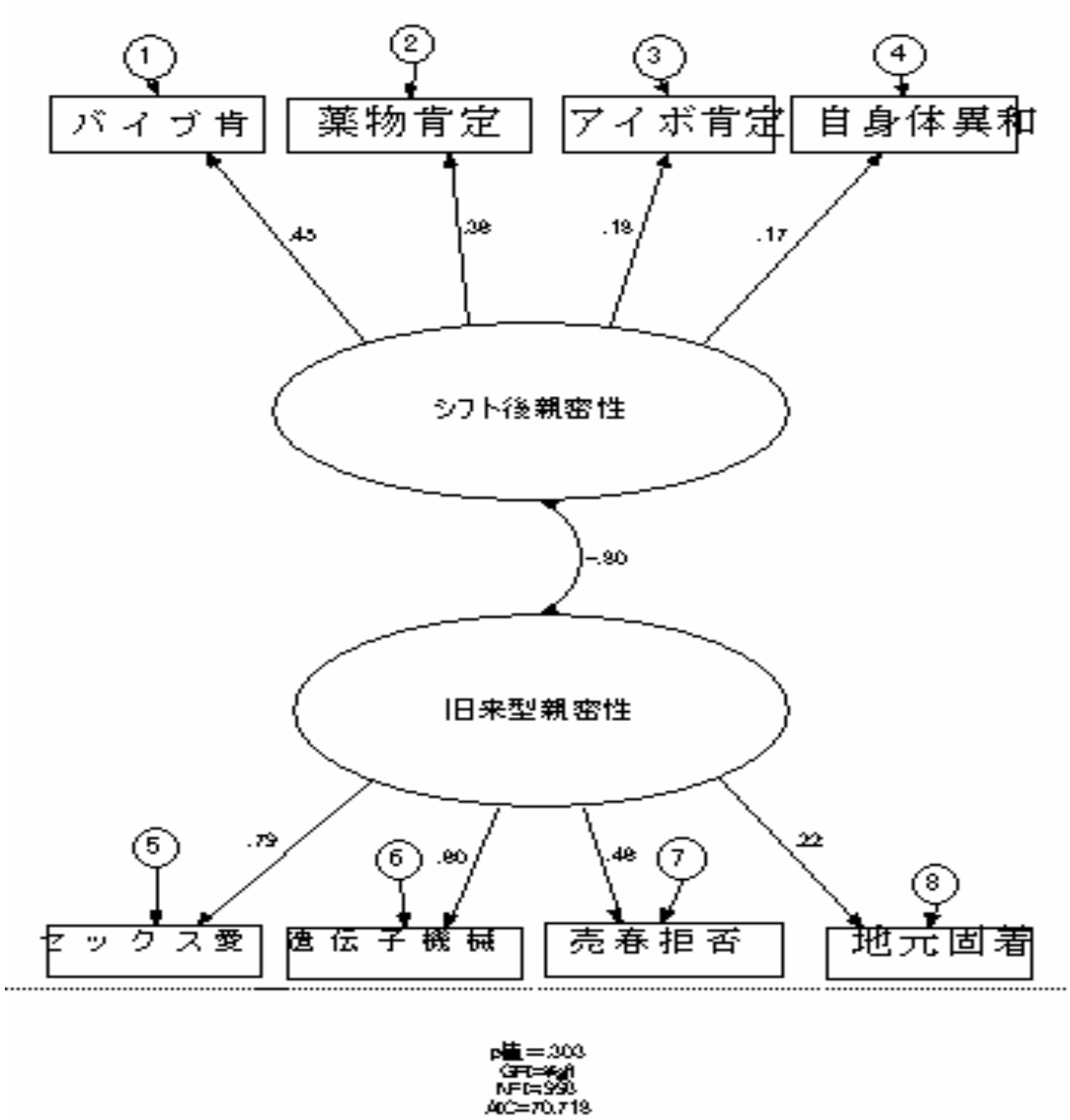
個々の事件についての総合的な完全なコメントはさしひかえたいし、それをおこなおうとする意図も筆者はもたない。また、これら「自己」をめぐる現象の詳細な分析についても別稿＝モノグラフを期したい。しかし、二点述べたい。第一は、個別の事件を総合的に理解するための一つの「部品」としても、本仮説の是非をつめることはほとんど必要になるだろうということ。第二は、もし、このような事件・事象においても本仮説が効いているのだとしたら、そのような事件・事象をたとえば若者論などといった限定された視野でのみ見ても不十分になるだろうということである。一見すると関連の薄いような他の社会事象と通底的な関連がないかを探ってみることが必要になると思われる。

【おわりに】

以上、親密性前線シフト仮説を提起し、それが波及していると目される諸現象について略述してみた。ただいま進行中の研究アプローチを読者にむかって「誘う」という本稿のスタンスから、読者にあっては食い足りない・噛みごたえのない読後感をもたれるかもしれない。その点お詫びしたい。仮説の提示部分までを通常の学術論文として、そのあとの諸トピックの略述はプログラムの提示（一種の予告編）として読んでいただけると幸いである。

また、読者のなかには、上記の個々の現象の記述については興味ぶかいとはいえ、それらが、親密性前線のシフトという「一つの共通の」変化現象からの諸波及物なのか、疑問に感じるかたもいるかもしれない。まさにこのような問題意識でもって、筆者は自分が参加したある社会調査に、上記諸トピックに対応するような設問をまじえてみた (1) 。この調査・分析の詳細は、別稿（一つのモノグラフ）に譲らざるを得ない。が、一つの結果として、以下（次ページ）のような、共分散構造分析のモデルを得ることができたので紹介したい。これはあくまで一つの結果＝モデルにすぎない。他の解釈を排除するものではない。が、これら諸トピックの通底性を示唆しているということはできるだろう。

以上、本仮説は、状況証拠的だとはいえ、いくつかの点から、「示唆」されている、と思われる。今後もさらに探求するに値する、一つの研究プログラムであると思われる。



注

(1) この調査は、2002年 6 月に九州のある地方国立大学のおもに文科系の学生さんたちを対象におこなったものである。他の調査参加者（実行者）ならびに回答者のみなさんに感謝する。（回収数 188 人。男性88人、女性99人、性別不明１人）。　核になる設問は、以下の四つである。すべて、「強い肯定」から「強い否定」までの六段階の回答肢でおこたえいただいた。「最近、セックスの時に、いわゆる「大人のおもちゃ」のような電動性具をつかうひとがいるようですが、あなたは、どう感じますか？。」（「バイブ肯定」と表記する。以下同様）。「もし、まったく無害で習慣性のない、快楽をもたらす薬物（ドラッグ）が開発されたとしたら、それを利用することについて、どう思いますか？。」（薬物肯定）。「自分の体が自分のものではないようにかんじられる、といったようなことがありますか？。」（自身体異和）。「最近、ソニーの「アイボ」な

ど、ロボットのペットを飼っている人がいますが、あなたがペットを飼うとしたら、どうおもいますか？。」（アイボ肯定）。また、旧来型（本来型？）の親密性へのコミットメントの多寡を計測するため、以下のような設問もおこなった。「セックスには愛がともなっているべき、とおもいますか？。」（セックス愛必要）。「「人間も遺伝子を複製する機械にすぎない」。こういう意見について、どう、かんじますか？。」（遺伝子機械嫌悪）。「最近、売春を「セックスワーク」として、他の公序良俗に反しないことに条件に、許容する議論も一部であるようですが、あなたは、どうかんじますか？。」（売春拒否）。「あなたは、生まれ育った地元で、暮らしたいですか。それともいろいろな土地で暮らしてみたいですか？。」（地元固着）。これらの設問（変数）を、共分散構造分析にかけて得られたのが本文のモデルである（係数は標準化推定値）。いうまでもなく、共分散構造分析の利用にあたってはいくつかの留意しなければならない点があるだろう。　第一は、潜在変数（図の楕円の変数）の「命名」は結局のところは、分析者の恣意（勝手）であるということである。第二は、上記のモデルにおいて、上図のような、変数間の因果係数が導出できたとして、このモデルが、与えられたデータにたいする唯一のありそうなモデルとはかぎらない、ということである。共分散構造分析においては、通常は、複数の「競合」モデルをたてて、それらのうちから適合度がもっとも高いと評価できるモデルを選択するのが定石だろう。この点、このモデルは他の競合モデルとの比較はおこなっていない。しかし、本稿の「シフト仮説」自体、上記の諸変数にたいして、例の「シフト」が「最大、もしくは、唯一」の説明・原因であるとは主張していない。よって、この不備はわれわれの問題意識からは致命的とはいえない、とおもう。また、（共分散構造分析とは特に関係ないが）、「一回だけのアンケート」では基本的には、「変化」は計測することはできない。その点では、この調査は、われわれの仮説にたいして、たかだか「状況証拠」にしかならない。

【文献】

Badcock 2001 Evolution & Explanation (The London School of Economics and Political Science における講義パワーポイント文書)

Baron-Cohen, Simon1995 Mindblindness : an essay on autism and theory of mind. The MIT Press=長野敬 , 長畑正道, 今野義孝　訳2002『自閉症とマインド・ブラインドネス』青土社

Baron-Cohen, Simon 1999 “ The Extreme Male-Brain Theory of Autism ” edited by Tager-Flusberg, Helen Neurodevelopmental disorders　MIT Press

Maines, Rachel P. 1998 The technology of orgasm : "hysteria," the vibrator, and women's sexual satisfaction. The Johns Hopkins University Press

宮台真司, 香山リカ　2001　『少年たちはなぜ人を殺すのか』創出版

桜井芳生　2001　「不死の生命・永遠の人格の誕生、ロボットペットとヒトとの新たな関係性　－それは、はたして「他人ごと」、か？－」『新しい関係性を求めて - コミュニケーションの諸相 - 報告書NO.2』（鹿児島大学）

（さくらい　よしお　sakurai.yoshio@nifty.com　http://member.nifty.ne.jp/ysakurai/）